

社会保障の未来

関西学院大学法学部・大学院法学研究科 教授 金崎 健太郎

人口減少時代に入った日本。少子化に伴う生産年齢人口の減少と高齢者人口の増加を背景に、将来の社会保障について不安を抱く人は多い。債務残高の累積にもかかわらず相変わらずプライマリーバランスが赤字という国の財政状況もその不安に拍車をかけている。一方で世界に冠たる長寿命を獲得しているこの国で安心した生活設計をしていくためにも、持続可能な年金や医療、介護の充実を望む声は依然として大きい。むしろ変化が激しい社会状況のもとで社会保障に対する期待が大きいため、将来の制度維持に対する不安が増大しているのかもしれない。人口減少という大きな転機にさしかかっているいま、現状を直視し社会保障制度の将来を真剣に議論すべき時期が到来している。

最初に紹介する『教養としての社会保障』（香取照幸／著、東洋経済新報社、1,728円）は、厚生労働省で長年にわたり社会保障に携わってきた著者が社会保障制度の理念、制度体系をはじめとした日本の社会保障制度を分かり



『教養としての社会保障』
香取照幸／著
東洋経済新報社

が挙げられるが、本書は社会保障制度の内容はもとより、それが国の社会や経済、財政とどのように繋がっているのかという基本視線

を分かりやすく明らかにしてくれる。そのうえで日本が目指す社会の姿を明らかにしつつ、年金と医療・介護についての具体的な制度改革について、専門家ならではの具体的なアイデアを提示している。複雑な社会保障制度の概要と課題、そして将来に向けた改革の道筋を分かりやすく明らかにした本である。

次に紹介する『人口減少と社会保障—孤立と縮小を乗り越える』（中公新書）（山崎史郎／著、中央公論新社、950円）は、やはり厚生労働省で介護保険制度の創設や社会保障と税の一体改革など社会保障制度に深く関与した著者が、実務家としての知見に基づき、今後の社会保障制度の姿について具体的な政策案を提示した本である。全世代型の社会保障への転換や社会的孤立のリスクに対応するための地域セーフティネットの構築など、従来の制度の枠組みにと



『人口減少と社会保障—孤立と縮小を乗り越える』
山崎史郎／著 中央公論新社

らわれず、今後の日本社会に適応する社会保障制度とはどのようなものか、という視点から提起された政策案はどれも説得力を有するものである。

言うまでもなく社会保障は制度であるが故に社会の変化に応じて変えることが可能であり、変えなければならないものである。二人の実務家の具体的な提言は、日本の社会保障に十分に未来があることを示しているのではないだろうか。